

テニソンとリー・ハント

—『詩集』(1842) 出版の背景

江澤美月

1. はじめに

アルフレッド・テニソン (Alfred Tennyson, 1809-92) が、10年間の沈黙の後に1842年に上梓した『詩集 (Poems)』は二巻本であり、第一巻は既に出版された『主に抒情的な詩 (Poems, Chiefly Lyrical)』(1830)と『詩集 (Poems)』(1833)を基とし、第二巻はこれまで発表されてこなかった新しい詩を主に収録している⁽¹⁾。テニソンがこの時期に新たな詩集を出版した理由について息子のハラム・テニソン (Hallam Tennyson) は、父親がこの頃結婚を控え、経済的に安定する必要がある、また功名心にはやっていたことを挙げている ([H. Tennyson] I 165-166)。しかし、この時、最初の詩集『主に抒情的な詩』の時には絶賛したジャーナリスト兼文芸批評家であるリー・ハント (James Henry Leigh Hunt, 1784-1859, 通称リー・ハント) が、『詩集』第一巻は、以前発表された二冊の詩集を完全収録したものではないのに加え、選択された詩についても原詩に不必要な修正が施されていると指摘している ([Hunt], *Church* 361)。ハントはまた、第二巻に収録された「ゴディバ (“Godiva”)」のような新しい詩についても批判している ([Hunt], *Church* 362)。本稿では、こうしたハントの批評を踏まえ、テニソンが1842年に『詩集』を出版した背景を探る。

2. 『詩集』(1842) 出版までの批評の経緯

はじめに、テニソンが1842年に『詩集』を出版するまでのテニソンの評価を、ハントとの関係から概観する。今日ハントは、雑誌『エグザミナー (*The Examiner*)』の編集者であった一方で、1816年に詩人ジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821) やパーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822)

を文壇に紹介し、二人の詩人と共に「詩のコックニー派」として当時政権与党であったトーリ党を支持していた雑誌『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン (Blackwood's Edinburgh Magazine)』の編集者ジョン・ギブソン・ロックハート (John Gibson Lockhart, 1794-1854) から、「詩のコックニー派」として批判されたことが知られている⁽²⁾。キーツもシェリーも 1820 年代に死去しているのに、テニソンは、ハントが称賛した詩人の第二世代にあたる。このような状況から、ハントに称賛された詩人として気になるのは、「詩のコックニー派」批判である。そこでこの批判が二人の詩人の死後どうなっていたかを見ていくことにする。

するとわかったのは、テニソンをハントに紹介したのは、テニソンの親友アーサー・ヘンリー・ハラム (Arthur Henry Hallam, 1811-33) だったということである。テニソンと出会うことになるケンブリッジのトリニティ・カレッジ入学前、ハラムは数か月をイタリアで過ごし、キーツとシェリーの詩に心酔していた (Pinion 185)。そこで彼は当時雑誌『タトラ (The Tatler)』の編集者であったハントに、テニソンが実名で出版した最初の詩集⁽³⁾『主に抒情的な詩』の書評を、1831 年 1 月 18 日と推定される手紙で、次のように依頼したのである。

アポロンの末裔であるジョン・キーツの死以来、文芸の中心であるパルナッソスの我がイギリス領土は、ほろ切れや継ぎはぎだらけの服をまとった王らしからぬ王によって威張り散らされています。しかし、私の思い違いでなければ、真の世継ぎが見つかったのです。この数冊の詩集に対する私の判断に賛同してくださるのなら、あなたはきっとご自分が現在主宰していられる『タトラ』誌で、好意的に取り上げて下さることでしょう。 (Kolb 396)

ハラムが「数冊の詩集」と述べているのは、彼がテニソンの兄であるチャールズ・テニソン (Charles Tennyson) の詩集『ソネットと折々の作品 (Sonnets and Fugitive Pieces)』の書評も合わせて依頼しているからである (Kolb 396)。

これに対しハントは、2 月 24 日から 3 月 3 日まで、四度にわたり『タトラ』でテニソン兄弟の詩の書評を行った (cf. Pinion 14)。2 月 24 日の初回の書評の中に、次の一節がある。

我々はこの二人の若者の登場が良い時代であること、二人が執筆する環境、つまり世間的に成功することが、二人の世間にうとい精神に、影響を与えないと考えられる環境を、羨しく思う。二人は狭量な要求や、苦痛を与える敵意のいずれによっても、自分たちの目的追求を反らされることがないように思えるからだ。あの頃はそれほど昔ではないが、今はシェリー氏やキーツ氏の時代とは異なる。テニソン家の人たちは、あの頃よりも幸せな時代に登場した。二人は世間の憶測と戦う必要も、真と美を信仰したがために殉教者となる必要もないのである。

([Hunt], *Tatler* 593)

ハントはハラムの依頼に応え、テニソン兄弟の詩集の書評を行っている。彼はまた、テニソンをハラムが望んだキーツの後継者としてのみならず、彼が1817年に雑誌『エグザミナー』の編集者としてキーツと共に紹介したシェリーの後継者としても、捉えている。ここでハントは過去の批判を示唆するのみで、それが何であるか明らかにしていないが、シェリーによるキーツの哀悼詩『アドネイス (*Adonais*)』をイタリアから持ち帰っていたハラムは (Pinion 11)、勿論、二人の詩人およびハントが受けた「詩のcockney派」批判についても知っていた。1831年8月ハラムが『イングリッシュマンズ・マガジン (*The Englishman's Magazine*)』に寄稿したテニソンの詩の書評は、そのことを示している。

我々は躊躇することなく確信を表明しよう、cockney派は（この呼称は、同派が偶然居合わせた環境を皮相的に見て嘲笑的につけられたものであるが）ミルトンの時代からこの国に存在するいかなる芸術形式よりも純粋なインスピレーションを持ち、それが奉じる真実の分け前に預かって従っていた。cockney派の中心人物はリー・ハント氏であり、ハント氏は、その方向性を示す以上のことは出来なかったが、彼の目指した目的は、無数の個人の思惑や政治的な立ち位置によって、歪曲して伝えられていた。しかしハント氏は非常に優れた性質をもった二人の人物に付き添われていた。彼等は、生まれながらの詩人であり、生存中は詩人として活躍し、余りにも早く墓へと赴いた詩人であった。シェリーとキーツはまさしく対極に位置する天才だった。

([Hallam] 617、下線で示した強調は原文によるもの)

ここでハラムは、「コックニー派」という『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』のロックハートが用いた呼称を用いることによって、キーツやシェリーに対する批判が「詩のコックニー派批判」であると特定し、さらにハントが「詩のコックニー派」の「中心人物^{カボセツタ}」であったと述べている。ハラムが熱烈なホイッグ党支持者であったことを考えると (Lang 676)、彼はトリー党支持者による「詩のコックニー派」に対する過去の批判を承知の上で、ハントに依頼しているとも言える。しかし、もちろん彼がこうしたのも、1830年に政権交代が起こってホイッグ党のチャールズ・グレー (Charles Grey, 称号 Earl Grey, 1764-1845、首相 1830-34) が政権運営を担い、「詩のコックニー派」批判が既に終焉したとの認識に基づくものだった。

しかし、「詩のコックニー派」批判は、実際は終わったわけではなかった。1817年「詩のコックニー派」批判を始めたロックハートは、1825年からトリー党の機関誌『クォーターリー・レビュー (Quarterly Review)』の編集者になっていて、かつてキーツを酷評したジョン・ウィルソン・クロカー (John Wilson Croker) に⁽⁴⁾、1833年4月、キーツの詩に類似しているとして (Jump 73)、テニソンの二冊目の『詩集 (Poems)』(1833)を批判させている。また、一冊目の『主に抒情的な詩』に関しても、ロックハートの後継者であるクリストファー・ノース (本名ジョン・ウィルソン (Christopher North (John Wilson), 1785-1854) が、1832年2月『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』誌上で、テニソンを次のように評しているからだ。

私はアルフレッド・テニソンに期待を寄せている。しかしコックニー派がテニソンを駄目にしているようだ。(中略) テニソンはメロディと調和に対する感覚が鋭敏である。そして非常にすぐれた想像力のひらめきがある。彼には生まれつきの才能がある。
(Ricks I 501)

ノースはかつてのロックハートほど激しい批判は行っていないが⁽⁵⁾、「コックニー派」という言葉を持ち出すことで、テニソンとハントの結びつきを牽制しているといえる。ノースはまた、三か月後の5月には、ついに『主に抒情的な詩』の批判全面的な批判に乗り出した。彼は冒頭部分で、若い詩人に降りかかる災難として、グ

ループ内でちやほやされることを挙げ、それがもしコックニー派の中で行われるのなら最悪であり、それがテニソンの不運である (Jump 50)、と述べている。そして彼は、テニソンに対して次のように釘を刺した。

我々は彼 [テニソン] が成功するのを見たいと望んでおり、名声は従順の賜物であると言っておく。もし従わないなら、彼は確実に忘れ去られるだろう。

(Jump 52)

これはかなり脅しに近いが、ではテニソンの詩の何が問題なのかを、ノースは次のように説明している。

しかし、彼 [テニソン] が多くのことを既に知っている和我々が言うならば我々は間違っているかも知れないが、彼の才能が定められた成功へ到達するまでに知らないことが少なからずあり、更に鍛錬が必要であるということは言っても差し支えないだろう。ある表現方法、言い換えれば、単語のつづり方と発音の仕方、に対するつまらない偏愛は、我々がまだ男の子に過ぎないと見做す者に容易に見出すことが出来るものである。しかし、もしその偏愛傾向がそのまま、大人の男になってもそうだとしたら、[羊を例として考えると] 羊としては愚かに見えないだろうか、もし羊が、頭と髭が我々と同じく灰色になってもメーと鳴き続けたなら、その羊は雄羊としては変だし、他の雄羊たちは、去勢された雄羊以上に、その雄羊を相手にしないだろう。

(Jump 63、強調は原文によるもの)

ここで直接批判されているのは、単語のつづり方と発音の仕方が子供じみていることだが、問題はこうした表現の稚拙さが、「大人の男ではなく男の子である」、および「外見は雄羊だが内面が伴っていない雄羊」として批判されていることである。

この男らしさの欠如は、テニソンの詩をキーツ的な「徹底的なコックニー古典」 ([Bulwer] 43-44)、と批判したエドワード・ブルワー (Edward George Bulwer Lytton, 1803-73) によって (Pinion 18)、次のように言い換えられている。

我々がこのように若い詩人に対して厳しいことを言ってきたのは、他の同時代の詩人よりも彼に見込みがあると思うからである。そして今は詩人にとって再び立ち上がる時である。子供っぽさ、奇をてらった比喩、特定の派と時期に縋り付いている女々しさ、こうしたものから彼は立ち上がって彼に定められた、相応しい、男らしい物の見方に目覚めなければならない。 ([Bulwer] 45)

ブルワーはノースと同様、テニソンの才能を認めた上で、ノースが「大人の男ではなく男の子である」および「外見は雄羊だが内面が伴っていない雄羊」という形で批判したテニソンの詩の「男らしさの欠如」を、「女々しさ」として批判している。

こういった「詩のコックニー派」批判に対し、テニソンがハラムに抗議した手紙は確認できない。しかしハラムが1832年4月30日から5月6日と推定されるテニソンに宛てた手紙の中で、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』のノースの批評はそれほどひどくないと力説していることから (Kolb 562)、テニソンが如何に批評を気にしたかを伺い知ることが出来る。従って、ハラムの死から10年近く経った1842年に『詩集』を出版するにあたり、最早ハラムという強力なサポーターを失ったテニソンが、自分の詩に対し「男らしさ」を求めたノースとブルワーの批判を考慮したのは、ある意味当然であろう。その結果、この詩集に対し、ハラムが言うところの「詩のコックニー派」の中心人物であったハントが、「文字上のダンディズム、すなわち立派なジェントルマン主義」が進行していると述べ ([Hunt], *Church* 362)、男らしさが増していることを批判することになるのなら、当初ハラムがキーツの後継者としてハントに紹介したテニソンは、ハントから離れノースやブルワーに近づいたことになる。

3. テニソンの詩の男らしさ

ハントがテニソンの詩のダンディズムを指摘したのは、1842年の『詩集』になっではじめて収録された「ゴディバ」に対してであった。ここから「ゴディバ」を中心にテニソン詩の男らしさを検証する。まずハントの「ゴディバ」観を示すものとして、1819年10月27日に彼が当時編集していた雑誌『インディケーター (*The Indicator*)』に掲載したエッセイ「ゴディバ ("Godiva")」 (Stabler 110) に注目す

る。

このエッセイを読んで気が付くのは、ハントが女性であるゴディバの意見に、同調して書いていることである。ハントによれば、レイチェスター卿レオフリックは、エドワード懺悔王（Edward the Confessor, c. 1003-66）の時代、イングランド中部の大きな封建領土の領主であり、この物語の舞台であるコヴェントリーは、彼の領地の一角だった。当時コヴェントリーは非常に高額な通行税を課していたが、学問の浸透により、時代のリベラルな考えの影響を受けていた伯爵夫人ゴディバは、レオフリックに税を廃止するように繰り返し懇願し、遂にレオフリックから、自分が裸で馬に乗りコヴェントリーの町を通り抜けたら税を廃止するという言質を取った。約束実行の日、ゴディバは、住民が扉と窓を固く閉ざし、その多くが涙を振り絞りながら、敬虔な気持ちで彼女の馬が通り過ぎる音を待つ中、うつむき加減ではあるが、恥じらうことなく、髪をなびかせて、静かな人気のない町の中を、靈妙な天使のように通り過ぎた、という（[Hunt], *Indicator* 17-18）。つまり、ハントにとってゴディバの物語は、自分と身分の異なる労働者階級の生活の困窮状態に心を痛め、その状況を改善したいというリベラルな考えを持った女性が、労働者階級の総意を得て、共に封建領主を感化する話なのである。

一方、テニソンの「ゴディバ」は、ゴディバに裸体をさらさせることによって困らせ、通行税廃止の要求を断念させようとした男性側、レオフリック側、封建領主側に立っている。それというも、テニソンの詩のゴディバは、コヴェントリーの町中を裸体で通過するにあたり無数の好奇の目に晒されているような錯覚に怯えているからである。

雨どいの上の小さな広く口を開けた頭には
見るための狡猾な目が付いていた
吠える野良犬は彼女 [ゴディバ] の頬を赤らめさせた
彼女の乗った馬の足音はますます大きくなった
かすかな恐怖が彼女の体中を駆け巡った
目隠しであるはずの壁に無数の裂け目や穴がある
そして頭上の怪奇な妻壁が一斉に見つめている (Tennyson, *Poems* II 115)

ここに描かれたゴディバは、恥じらうことなく堂々と通り過ぎたハントのゴディバと大きく異なる。このことに関しハントは次のように述べている。

専門知識のない批評家が述べるように、特に誰にでも分かる筆遣いの上手さやレディ・ゴディバの置かれた複雑な立ち位置は、非常によく表現されている。しかし、我々は、本当の意味での専門家は、この主題のこの扱いには感心しないと思う。ヒロインや、家の中にいた善き人々の気持をもっと書くべきであったのに。その善き人々は、さもしい仕立屋のように「覗き見をする」ことを考えずに、泣き、祈り、通り過ぎた姿の見えない天使を、愛する人々である。これが誉あるコヴェントリーのヒロインに対する敬意の表し方であろう。そしてこのことこそ、テニソン氏ほど巧みにできる人が少ないことなのである。

([Hunt], *Church* 370)

ハントは、一つ前の詩の引用で確認した擬人的な覗き見に加え、覗き見をした仕立屋トムまでも登場させたテニソンによるゴディバの主題の扱い方を (Tennyson, *Poems* II 115)、詩人として彼の力量を買っていただけに非常に残念がっている。

テニソンを「詩のコックニー派」として批判した側はどうしただろうか。この時かつて『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』で「詩のコックニー派批判」を始め、『クォーターリー・レビュー』の編集者になっていたロックハートは、キーツを酷評したクローカーに1832年テニソンの詩を批判させたことを悔やみ、1842年にはテニソンの友人ジョン・スターリング (John Sterling, 1806-44) にテニソンの『詩集』を批評させたことが知られている (Pinion 36)。そこでスターリングが書評を行った1842年9月の『クォーターリー・レビュー』を見ると、彼は実はテニソンの詩の批判を行っていることがわかる。この時スターリングは、現代のイギリス詩人は、なぜギリシャ神話のユリシーズの話を描くべきではなく、それよりもむしろアメリカ大陸を発見したクリストファー・コロンブス (Christopher Columbus, c. 1451-1506) や喜望峰を回るインド航路を発見したバスコ・ダ・ガマ (Vasco da Gama, c. 1469-1524)、そして最初に地球を周航したフランシス・ドレーク (Francis Drake, c. 1540-96) のことを書くべきなのか分かっていると述べる。そしてその理由は、コロンブス等の気持や目的が我々の理解にかなり近づいて来て

いるからであると説明し、テニソンの「ゴディバ」について次のように評している。

テーマは異なるが、「ゴディバ」に関してさえも、同様の事がいえる。この詩もまた見事に巧みに制作されている。しかし、間違いなく事実の風変わりさや残酷さが際立っている。その奇想は、散文で語られるのならまだしも、詩で語られるのには適さない。(Jump 120)

スターリングは、ゴディバに裸体で乗馬させたレオフリックを残酷であると感じている。男女間の力関係で言えば、スターリングはゴディバを男性に虐待された女性と受け止め、家父長的な権力の大きさが突出していることが、現代と異なるとして批判的な見方を示している。ヴィクトリア朝社会の特徴として、家父長制が挙げられることが多いが、そのヴィクトリア朝初期に生きていたスターリングが、ここで我々が生きる現代（つまりスターリングにとってはヴィクトリア朝）と異なる、と主張していることに注目したい。

『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』はどうだろうか。同誌は1844年、テニソン同様ハントが高く評価したパットモアの最初の作品『詩集 (Poems)』をキーツやシェリーの詩と同傾向を持つものとして批判するが⁽⁶⁾、その時パットモアの詩「リリアン (“Lilian”)」とテニソンの1842年の『詩集』に収録された詩「ロックスレイ・ホール (“Locksley Hall”)」に類似点があることを認め、次のように述べている。

なぜ彼 [テニソン] は、彼自身、「ロックスレイ・ホール」の熱愛しているヒロインに共感する優しさを持っていたにも関わらず、その物語のヒーローである恋人に、裏切らせなかったのだろうか。同様の状況における男らしいシラーの詩と、どれほど異なることか！ 彼 [シラーの男性主人公] は、自分の愛を失なった愛人に対する溢れるような優しさの中で、深い悲しみを発露せずにはいられない。(Blackwood's 335)

この後『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』は、パットモアの『詩集』と同年に出版されたブルワーによるロマン派の詩人ヨハン・クリストフ・フリードリ

ヒ・フォン・シラー (Johann Christoph Fredrich von Schiller, 1759-1805) の英訳から、「ミンナに (“To Minna”)」の一節を引用しているが (*Blackwood's* 335, cf. Schiller 274)、そこには主人公の男性が、自分が救えなかったために墮落した女性を遠くから眺め、やがて彼女が色香を失い老いていくことを、彼女のために悲しんでいる場面が描かれている。従って『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』が推奨するシラーの詩の「男らしさ」とは、男性主体の物の見方を示し、同誌は、失恋してその状況に甘んじる男性主人公を描くテニソンの詩「ロックスレイ・ホール」に対し、「男らしさ」が不足していると批判している。

ここで再び1842年の『クォーターリー・レビュー』のスターリングの書評に戻ると、彼もまた1844年の『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』同様「ロックスレイ・ホール」が「自分が愛した女性に裏切られた若い男性」を描いていると指摘している (Jump 123)。彼はこのことを特に批判しているわけではないが、指摘したことでこのことを男らしさの欠如と捉える「詩のコックニー派」批判の文脈に取り込まれてしまっていると言える。

このように、「詩のコックニー派」批判は、テニソンが1842年の『詩集』で家父長的な男らしい「ゴディバ」を発表した後も、続いている。

4. テニソンの「詩人」とリー・ハント

さて、ハントがテニソンの『詩集』の第一巻について、以前に発表した詩に不必要な加筆を施していると批判したことには、本論文の冒頭部分で触れたが、1842年以降も「詩のコックニー派」批判が続いていることを踏まえ、次に、ハントが、第一巻に収録された詩のうち「詩人」に関しては修正にも関わらず称賛していることについて考察する。

「詩人」という詩は、我々にシェリーのことを思い起こさせる。「詩人」にはいくつかの点で詩人一般について述べているように見せかけている部分があるが、シェリーの人物描写を意図したものではないとは言いきれない。もしシェリーのことを書いているのならば、今回の詩集がもとの詩に加筆したとしても、我々はシェリーのことを公に書いたテニソン氏の大胆さを称賛すべきである。

本論文の2で確認したように、テニソンの友人のハラムは、シェリーをハントやキーツと共に「詩のコックニー派」の主要人物と捉え、テニソンをその後継者として高く評価していたから、ハントは、「この詩は、今回の詩集がもとの詩に加筆したとしても」と述べることで、いわばハラムが設定した路線に、テニソンを戻したと言える。

それでは、テニソンは「詩人」の何をどのように修正したのだろうか。変更がある終わりから三連目は、その前の二連とつながりがあるので、ここでは終わり五連を引用する。

そして自由はあの八月の日の出の時刻に
美しい自信に満ちた眉を上げた。
その時太陽の焼き尽くすような目の前で
儀式儀礼は雪のように溶けた。

あの東方の空によって日に晒された
自由のうぶな服に血はついていなかった、
しかし彼女の鋭い目の
眼球の隈あたりに丸く血がついていた。

そして自由の服のへりに書かれていたのは
白髪は無秩序を雷に打たれたように驚かせる称号、叡智。
そして彼女が語る時、

彼女の言葉は雷を引き寄せ、
雷鳴の後に続く稲妻のように、人間の心を動揺させ、
地上を驚かせる。

彼女の言葉の意味もそうである。

自由の右腕は怒りの剣を投げつけるのではなく
一人の亡き詩人の作品を投げつける、そして詩人の言葉で
自由は世界を揺るがす。

(Tennyson, *Chiefly* 84-85、強調は原文によるもの)

ハントは暴力に訴えるのではなく、言葉によって自由な世界を実現出来る詩人の力に注目している。テニソンの1842年の『詩集』では、上の引用の下から三連目の「無秩序」が、「権力のあらゆる邪悪な夢」に書き替えられるのだが (Tennyson, *Poems* I 49)、この「無秩序」という言葉と設定が8月であることに、ハントはこの詩とシェリーの関連性を見出しているようだ。それというのも、シェリーの詩「無秩序の仮面行列」(“The Mask of Anarchy: Written on the Occasion of the Massacre at Manchester”)は、1819年8月16日の「ピータールーの虐殺」事件で、自分たちの生活を圧迫する穀物法の撤廃のために選挙法改正を求める民衆を、治安当局が武力制圧した事件に衝撃を受けて執筆されたものであるからである。実はハント自身は、シェリーのこの詩に深い関わりがあった。シェリーの「無秩序の仮面行列」は、ハントが8月22日の『エグザミナー』でこの事件を報道し、トーリ党のリヴァプール政権を「権力という厚かましい仮面を被った男たち」と批判したことに応答する形で書かれたものであったが、治安六法が制定され言論が制限される中、止む無く発表を見送っていたからである。その後急逝したシェリーの遺志をついで、ハントは「無秩序の仮面行列」を選挙法改正運動が高まる中、1832年11月選挙法改正促進の書として発表し(江澤 41, 43, 47-9)、これを、テニソンの親友ハラムに献呈している。ハラムは1832年11月13日と推定されるハントに宛てた手紙の中で、その御礼と間もなく出版されるテニソンの新作詩集、つまり1833年版の『詩集』について書いている(Kolb 683-4 n. 1, Brewer 194-195)。そのためハラムとテニソンは、ハントが1830年の『主に抒情的な詩』の書評で、テニソンの詩「詩人」についてシェリーのことを書いていると述べた時には、その意味がわからなかったかも知れないが、「無秩序の仮面行列」が発表された1832年11月には、その意味を理解したと考えられる。この後間もなく出版されたテニソンの『詩集』(1833)には⁽⁷⁾、「詩人」は収録されていない。

こうしたいきさつからテニソンが1842年の『詩集』で「詩人」から「無秩序」

の文字を削除したことは、「ゴディバ」で男らしさを表現すること以上に、ハントの影響を受けていない、つまり自分が「詩のコックニー派」であることの否認を表明したことに繋がるはずだった。それに対してハントは、テニソンが行った修正を元に戻そうとしていると言えよう。

5. テニソンと改革運動

それではテニソンは選挙法改正運動など、一連の改革運動についてどのように思っていたのだろうか。彼の息子のハラムは、回想録の中で次のように振り返っている。

改革のプロジェクトや博愛主義の行動について彼はよく省察していた。

来るべき年が生む歓喜を切望し
はじめて父祖の田畑を離れる時
少年のように熱意に満ちている。

チャーチストやソーシャリストの世論喚起運動が国を動揺させていた。私の父はその人たちを一律に投獄や制圧で対処するのではなく、広く国民的な教育によって、報道におけるより愛国的で党派性の少ない精神によって、自由貿易の部分的な採用によって、そして異なった宗派に所属する人の間に、熱意と共感を呼び覚ますことによって、対処すべきだと考えていた。

([H. Tennyson] I 185)

ここで息子のハラムが引用しているのは、「ロックスレイ・ホール」の一節である (Tennyson, *Poems* II 103)。この詩が書かれた 1837 年から 38 年は、反穀物法同盟が結成され (Ebbatson 1) 自由貿易の必要性が議論されていた頃だった⁽⁸⁾。本論文の 3 で『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』がこの詩を批判したことを確認したが、それはこの詩が改革の気運に溢れていたからに他ならない。上の回想録の引用には、父親であるテニソンがハント同様、この頃行われた労働者階級であ

るチャーチストの請願や、穀物法撤廃運動に対し、理解を示していたことが表れている。

しかし、チャーチストの請願が拒否されることによって暴動が起きた1842年(Ebbatson 1)、テニソンの考えに変化が生じる。それは、彼が1832年の『詩集』および1842年『詩集』の出版を依頼したエドワード・モクソン(Edward Moxon, 1801-1858)が、1841年チャーチストであるヘンリー・ヘザリントン(Henry Hetherington, 1792-1849)(Linton 45)による訴訟に巻き込まれる頃にあたる⁽⁹⁾。実はヘザリントンは、ハントが『無秩序の仮面行列』出版を委託したジェイムス・ワトソン(James Watson, 1799-1874)と共に活動していた。またヘザリントンは訴訟を繰り返すことにより、言論の自由を獲得していく役割を果たしていることが指摘されているので(White 44-47)、ハントは1832年自らが選挙法改正の書として提示した『無秩序の仮面行列』出版を、チャーチストであるワトソンに委託することで、彼等に普通選挙への道筋を示したとみられる(江澤 51-54)。その一方で、ハントは彼等の訴訟相手であるモクソンの弁護をするのだが、テニソン自身はそのようなことは、知る由もなかった。テニソンの詩「ゴディバ」がハントに批判されたことは本論文の3で確認したが、この詩の原稿には、詩の最後にもう一連が存在する。それを見ることは、出版者モクソンがチャーチストによって起訴されたことによってテニソンに起きた気持の変化を、読み解くヒントになるだろう。

私は覗き見をしたトムの話信じないが、
仮にそのような教養のない粗忽者がいたのだとしたら、
お気の毒なことだ、なぜなら言い伝えによると、
彼の目は見えなくなり前に垂れ下がったそうであるからだ。
もし現代の人が私の詩を品位に欠けるといふなら、
その人は覗き見をしたトムと同列である。
彼女〔ゴディバ〕は高潔な行いをしたのだから。 (Ricks II 176 n. 79)

ここでテニソンは、覗き見をしたトムの話信じないと述べることで、ハントと同じくゴディバと労働者階級の人々との一体感を示し、通行税を廃止して彼等の生活を救うためにゴディバが行った行為の高潔さを強調し称賛している。出版された

1842年版が示す通り、最終的にテニソンはこの一連を削除するのだが（Tennyson, *Poems* II 115）、彼がこの部分の推敲を重ねているのは、いかにゴディバと労働者階級との一体感を表現するかを、苦慮した結果ではなかろうか。ハントの書評を読んだテニソンが1842年10月11日と推定されるモクソンに宛てた手紙で「リー・ハントの書評は洞察力に欠けていて悲しい。」（Lang and Shannor Jr I 212）と述べているのは、本来用意していた一連を、ハントに読んでもらえなかったことに対する悔恨の現れであったのだろうか。その一方で、ハントが自分の知らないところで活動しているようだ、というテニソンの疑念は、ハントが二年後の1844年6月モクソンの弁護をすることで、強くなったのかも知れない。この時ハントはパットモアの『詩集（*Poems*）』の書評の前段として彼の詩集を出版したモクソンの弁護、称賛を行うのだが、テニソンは7月8日モクソンに宛てた手紙で「私はパットモアの本を見たことも、聞いたこともない」と述べ、至急送ってくれるように依頼しているからだ（Lang and Shannor Jr I 225）。そして1844年9月、先に述べた『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』による「詩のcockney派」批判に、テニソンはパットモアと共に、巻き込まれてしまう（Blackwood's 335）。

かつて『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』でノースがテニソンに警告した、我々に従わなければ忘れ去られる、つまり詩人として評価されない、という言葉が蘇る中、テニソンはロバート・ピール（Robert Peel, 1788-1850、首相1834-35、1841-46）の保守党（旧トーリー党）内閣によって新設された年金の受給を受諾している。このことをテニソンは、1845年の10月中旬と推定される、友人のトマス・ハードウィック・ラウンスレイ（Thomas Hardwicke Rawnsley）への手紙の中で、次のように弁明している。

私はそれ〔年金〕を受け取るのに何も卑屈なことはしていません。つまり、私は決して自分や他人を通して〔年金〕をせがんでいないのです。これは私からの言葉や仄めかしなしに私のためになされたことなのです。それにピールは私に、このことによって私が取り上げようと決めた如何なる意見を公共の場で表現する際にも、束縛を受ける必要はないといっています。ですから、もし私が女王陛下や宮廷やピール自身に対して癪に障ることがあったら、もしそうなら、私は彼等を、おそらく年金を受給されていない時ほどには率直にはではないかも

知れませんが、自由に明け透けに批判してよいということなのです。

((Lang and Shannor Jr I 247)

テニソンが必死に弁明している裏には、この年金受給が彼の友人のトマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) からテニソンのケンブリッジの同窓生で、当時保守党議員であったリチャード・モンクトン・ミルنز (Richard Monckton Milnes, 1809-85) に打診され、ピールへのミルンズの進言によって受給が決定したといういきさつがある (Reid I 81, 295-297)。また、上の引用の下から三行目くらいから、テニソンが今後の自分の活動に、ある程度の制限がかかることを、予想していることがわかる。

しかし、テニソンが年金受給のためには、発言の制限もある程度やむを得ない、と考えるに至ったのは、この頃、テニソンの労働者階級に対する気持ちに、変化が起こっていたからである。同じ手紙の中で彼は次のように語っている。

私はそれ [年金] についてミス・マーティノーみたいなことは、少しも感じていません。御存じのとおり彼女は、法律を自分で制定することが出来ない人から搾取することになると言って、[年金の] 受け取りを拒否しました。しかしそれは間違っています。彼女が年金を受け取らないことで人々をほんの少しでも救うことは出来ませんでしたし、その間 (人にそう思われることが、彼女の気に益々障ったのかもしれない) 彼女の友人が彼女のために予約購読をし、彼女の困窮状態を救っていたからです。もしその人たちが自分たち自身で法を制定出来るなら、もしこういったことが、文筆家が気分を高揚させる普通選挙権によって行われるのなら、私が狐狩りに対して一家言を持つみたいに、イギリス人の一般庶民が詩に対して一家言を持つというとてもないことが起こるでしょう。

(Lang and Shannor Jr I 247-8)

ここには、かつてチャーチストの活動に理解を示していたテニソンの姿はない。それどころか労働者階級の生活を少しでも改善しようと、何度も年金受給を辞退した文筆家ハリエット・マーティノー (Harriet Martineau, 1802-1876) の行為 (Lang and Shannor Jr I 247 n. 6) を批判し、労働者階級に選挙権を与えることへの危惧

を表明している。彼がマーティノーの名前を持ちだしたのは、彼女がかつて年金受給候補者であったのみならず、彼女の本の出版者も、自分と同じくモクソンであったからかも知れない。このようにして、テニソンは、かつて友人のハラムが設定した「詩のコックニー派」の後継者であることを止め、ハントの影響を脱していくのである。

6. おわりに

本論文ではテニソンが1842年の『詩集』を出版するにあたり、新たな詩に加え、それまで出版してきた『主に抒情的な詩』(1830)と『詩集』(1833)から詩を選別し、さらに改訂していることの意味とその背景を、それまで彼の詩を高く評価していたハントとの関係から再考した。まず、テニソンが1842年の『詩集』を出版するまでの批評を概観することにより、彼が、かつてキーツやシェリーがそうであったように、トーリー党支持者からハントの一派と見做され、「詩のコックニー派」と批判を受けた裏に、ホイッグ党の支持者であった彼の親友ハラムによる熱烈な「詩のコックニー派」支持があることが判明した。従って、ハラムの死後テニソンが、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』のノースを代表とする批判者の主張を受け入れていく過程は、ハントのみならず、自分をハントに紹介したハラムの影響を離脱することになる。このことは1842年の『詩集』で初めて発表された「ゴディバ」に顕著にみられる。

第二に、テニソンが1840年代頃、過激化してきたチャーチストの普通選挙権獲得運動を背景に、ハントがシェリーの『無秩序の仮面行列』を出版することで推進してきた選挙法改正運動から、距離を置いたことが挙げられる。本稿では、ハラムがこの詩集をハントから献呈されたことを背景に、テニソンがかつてハントにシェリーのことを書いているとして称賛した詩「詩人」から、「無秩序」の文字を削除したことに注目した。また、テニソンの詩の出版者がこの頃チャーチストのヘザリントンによって起訴されたこと、さらにテニソンの詩「ゴディバ」に、ハントのエッセイと同じく、ゴディバと労働者階級の一体感を示しながら、最終的に削除した一連が存在することも、考慮に入れた。チャーチストを含めた選挙権の拡大を目指していたハントは、シェリーの『無秩序の仮面行列』の出版をチャーチストである

ワトソンに委ねることによって、暴力によらない改革運動の推進を図っており、テニソンも当初は、ハント同様チャーチストの啓蒙が必要であると考えていた。しかし1841年、出版を依頼していたモクソンがチャーチストによって起訴されたことを契機に、テニソンは、チャーチストに選挙権を与えることに疑問を感じ、ハントの影響から離れるようになった、と考えられる。

註

- (1) エドガー・フィンレイ・シャノン・ジュニア (Edgar Finley Shannon, JR) はその例外として「聖アグネス (“St. Agnes”)」と「眠る美女 (“The Sleeping Beauty”)」を挙げている (Shannon 60)。
- (2) 詩のコックニー派批判については、Nicholas Roe, *John Keats and the Culture of Dissent* (Oxford UP, 2000), Jeffrey N. Cox, *Poetry and Politics in the Cockney School: Keats, Shelley, Hunt and their Circle* (Cambridge UP, 2004) を参照のこと。
- (3) テニソンは1827年4月20日兄弟のチャールズと共に、『二人の兄弟による詩 (*Poems By Two Brothers*)』を匿名で出版している (Pinion 7)。
- (4) クローカーの批評は、1818年9月に『クォーターリー・レビュー』に匿名で掲載された (Matthews 110-114)。
- (5) 特に激しい批判で知られるのが、1818年8月のキーツに対する批判 (Matthews 97-110) である。
- (6) パットモアの子孫のデレク・パットモア (Derek Patmore) は、後にノースがこの時の『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』の批判について曾祖父のパットモアに謝罪したが、ノース自身が執筆者であるか否かは不明としている (Patmore 47)。
- (7) 『詩集』(1833) は、1832年12月5日には既に出版されていたことが指摘されている (Pinion 18)。
- (8) 穀物法撤廃運動による中流階級と労働者階級の対立および、対立融和志向の考えの存在については、拙論、「エリザベス・ギヤスケルとリー・ハントー『メアリ・パートン』批判の背景」『比較で照らすギヤスケル文学』、日本ギヤスケル協会編、大阪教育図書、2018年、87-98頁参照。
- (9) モクソンは、メアリ・シェリー (Mary Wollstonecraft Shelley, 1797-1851) 編集の『パーシー・ビッシュ・シェリーの詩 (*The Poetical Works of Percy Bysshe Shelley*)』に「マブ女王 (*Queen Mab*)」を掲載したことが無神論的という理由で、1841年6月23日に起訴された (White 35)。

参考文献

- Blackwood's Edinburgh Magazine. "Poems by Coventry Patmore." Edinburgh: William Blackwood and sons, 1844, pp. 331-342.
- Brewer, Luther A. *My Leigh Hunt Library: The Holograph Letters*. U of Iowa P, 1938.
- [Bulwer, Edward]. "The Faults of Recent Poets." *The New Monthly Magazine and Literary Journal*. vol. 1. Boston: Allen and Ticknor, 1833, pp. 43-46.
- [Hunt, Leigh]. "Art. V.—Poems by Alfred Tennyson." *The Church of England Quarterly Review*. vol. 12. London: William Edward Painter, pp. 361-376.
- [———]. "Godiva." *The Indicator*. vol. 1. London: Joseph Appleyard, 1820, pp. 17-19.
- [———]. "Notices of New Books." *The Tatler*. London: R. Seton, 1831, pp. 593-594, 601-602.
- Ebbatson, Roger. "Tennyson's 'Locksley Hall': Progress and Destitution." *Darwin, Tennyson and Their Readers*, edited by Valerie Purton. Anthem Press, 2013, pp. 1-12. JSTOR, www.jstor.org/stable/j.ctt1gxpbw0.4.
- [Hallam, Arthur Henry]. "On some of the Characteristics of Modern Poetry, and on the Lyrical Poems of Alfred Tennyson." *Englishman's Magazine* 1, 1831, pp. 616-28.
- Jump, John D. editor. *Lord Alfred Tennyson: The Critical Heritage*. Routledge, 2007.
- Kolb, Jack, editor. *The Letters of Arthur Henry Hallam*. Ohio State UP, 1981.
- Lang, Cecil Y. Lang and Edgar F. Shannon Jr, editor. *The Letters of Alfred Lord Tennyson*. Vol. 1 Harvard UP, 1981.
- Lang Timothy. "Arthur Henry Hallam." *Oxford Dictionary of National Biography*. Edited by H.C.G. Matthew and Brian Harrison. Oxford UP, 2004, pp. 676-677.
- Linton, James William. *James Watson: A Memoir*. Appledore Private Press, 1879.
- Matthews, G.M. *John Keats: The Critical Heritage*. Routledge, 2009.
- Patmore, Derek. *The Life and Times of Coventry Patmore*. Constable, 1949.
- Pinion, F.B. *A Tennyson Chronology*. Macmillan, 1990.
- Reid, T. Wemyss. *The Life, Letters, and Friendships of Richard Monckton Milnes, First Lord Houghton*. 2 vols. New York: Cassell, 1891.
- Ricks, Christopher. *The Poems of Tennyson*. 3 vols. Longman, 1969.
- Schiller, Johann Christoph Fredrich von. *The Poems and Ballads of Schiller*. Trans by Edward Bulwer Lytton. Leipzig; Berne, 1844.
- Shannon, Edgar Finley, Jr. *Tennyson and the Reviewers*. Harvard UP, 1952.
- Stabler, Jane. "Leigh Hunt's aesthetics of intimacy." *Leigh Hunt: Life, Poetics, Politics*. Edited by Nicholas Roe. Routledge, 2003, pp. 95-117.
- Tennyson, Alfred. *Poems*. 2 vols. London: Edward Moxon, 1842.
- [———]. *Poems, Chiefly Lyrical*. Woodstock Books, 1991.
- [Tennyson, Hallam]. *Alfred Lord Tennyson: A Memoir By His Son*. 2 vols. New York:

Macmillan, 1897.

White, Newman I. "Literature and the Law of Libel: Shelley and the Radicals of 1840-1842." *Studies in Philology*, vol. 22, no. 1, January 1925, pp. 34-47. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/4171904.

江澤美月 「P. B. シェリーとリー・ハント——『無秩序の仮面行列』出版の背景」『人文・自然研究』第 13 号、一橋大学全学共通教育センター、2019 年、41-56 頁。